

パシー通りのアパルトマンの幽霊の話をしていたことが思い出されている（『容易な歳月』、『日記』第一巻、Ⅳ、二六九頁）。

- (23) Antonio Mor: *Julien Green, témoin de l'invisible*, traduit de l'italien par Hélène Pasquier, Plon, 1973, p.19.
- (24) Dr. J. Uijterwaal: *Julien Green, personnalité et création romanesque*, Van Gorcum & Cie, Assen, 1968, p.24.
- (25) Robert de Saint Jean et Luc Estang: *Julien Green*, coll. «Ecrivains de toujours», Nouvelle édition, Editions du Seuil, 1990, p.6.
- (26) グリーンの母は監督派教会に属していた。なお、父は長老派教会の信者であった。
- (27) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、一九三七年五月二十日、Ⅳ、四二八頁。
- (28) 『容易な歳月』、『日記』第一巻、Ⅳ、六頁。
- (29) グリーンは一九一六年四月、カトリシズムに回心していた。
- (30) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、一九三七年七月二十七日、Ⅳ、四四二頁。
- (31) 『暗い扉の前で』、『日記』第三巻、一九四一年一月二十三日、Ⅳ、五五五頁。
- (32) 『内なる鏡』、『日記』第六巻、一九五二年二月十六日、Ⅳ、一二六五頁。
- (33) ワイト島のベネディクト派修道院に入ることが計画されていた。
- (34) ジャック・プチの前掲書、二五頁。
- (35) 『亡霊』、『日記』第五巻、一九四九年五月二十二日、Ⅳ、一〇七七頁。
- (36) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、一九三七年十二月八日、Ⅳ、四五三頁。
- (37) 『美しき今日』、『日記』第七巻、一九五五年四月十一日、Ⅳ、一四〇五頁。
- (38) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、一九三九年二月八日、Ⅳ、五〇八頁。

(7) 「見えないものに向かって」、『日記』第八卷、一九六二年三月十九日、V、三〇〇頁。

(8) 強調は引用者。以下、特にことわらない限り同様。

(9) Jacques Petit: *Julien Green*, coll. «Les écrivains devant Dieu», Desclée De Brouwer, 1972, p.15.

(10) グリーンは『日記』のなかで、「私がこの小冊子(『パンフレット』)を書いたとき、信仰は私の心のなかで失われつつあったと思う。それで、意に反して自分から逃れようとしているのがよく感じられるものを、力づくでひきとめようとしていたのだ」と説明している(『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、一九四〇年十二月十日、IV、五四七頁)。

(11) 『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、一九四一年一月三十日、IV、五五六頁。

(12) 『残された日々』、『日記』第九卷、一九七一年九月二日、V、六一五頁。

(13) ジャック・ブチはプレイアード版『日記』の「註」(Notes)のなかで、星空の観照の記述を詳細に調べている。

(14) 『容易な歲月』、『日記』第一卷、一九三三年四月二十六日、IV、二三九頁。強調はグリーン。

(15) 『最後の美しい日々』、『日記』第二卷、一九三八年八月十一日、IV、四八一頁。

(16) 『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、一九四一年二月十二日、IV、五五八頁。

(17) 同右、一九四二年十月二十一日、IV、六九〇頁。

(18) 同右、一九四〇年八月二十五日、IV、五三一頁。

(19) ジャック・ブチの前掲書、一五頁。

(20) 『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、IV、五八九頁。

(21) ジュリアン・グリーンには、五人の姉がいた。ほかに、兄が一人おり、彼は七人きょうだいの末っ子だった。

(22) この日の『日記』には、「一晩中、風呂場から食堂まで大騒ぎ、ドアのノブはひとりでに廻るし、不思議な隙間風が吹くし、明け方には、凍るような息があたしの顔にかかるし、例の顔のない女がリュシーのベッドのすそに座りにきたわ」と言って、マリーが父に、

かし私は彼を完全に否認する勇氣はなかった。私は彼の存在を無視しようとしたが、彼のほうが私の存在を忘れるようにすることはできなかつた」(V、九七七―九七八頁)。

この文章では、肉体的な欲望のために、キリスト^{II}神の存在を忘れようとしたが、神のほうは自己の存在を忘れなかつたことが打ち明けられている。グリーン^Iの人生は、つねに神とともに、あるいは神のまなざしのもとにあつた。グリーンが信仰を衰弱させることがあつたとしても、完全に失うことがなかつたことは、この告白からも確認できる。グリーンは、母から受け継いだ信仰を、終生もちつづけたのである。

註

- (1) 『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、IV、六七〇頁。強調はグリーン。なお、グリーン^Iの作品からの引用は、プレイアード版「全集」(全八卷)による。Julien Green, *Oeuvres complètes*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 8 vol., 1972-1998.
- (2) 『亡霊』、『日記』第五卷、IV、一〇四六頁。
- (3) 同右、一九四八年十月十五日、IV、一〇四四頁。
- (4) 『ジュリアン・グリーンにおける告白の問題』(1)(2)——『悪人』にそくしての「考察」、山口大学「文学会志」第三十三卷、一九八二、九九―一二三頁、および同「独仏文学」第五号、一九八三、一二九―一四〇頁を参照。
- (5) 『夜明け前の出発』『開かれた千の道』『遙かな土地』『青春』が、グリーン^Iの自伝であるが、一九八四年にスイユ社から、『青春の終わり』を付け加えて、『若き歲月』(*Jeunes années*)という表題のもとに、二巻本にまとめて刊行されたことがあつた。ほかに、霊的自伝として、『人間に必要な愛』(一九七八)がある。
- (6) 『日記』からの引用以外、頁数は本文で示す。頁数の前のローマ数字は、プレイアード版「全集」の巻数をあらわす。

光が輝いているのだということを出さねばならない。私たちが何をなそうとも、私たちは、時には意に反して向かって行くのだ、私たちの精神にはまったく想像もつかない或る幸福のほうへ。この地上の影を惜しんだところで何になるだろうか？ 勇気をもち、希望をもって、死のことを、暗い扉の向こうに広がる光り輝く広大な国のことを考えなければならぬ⁽³⁶⁾」。

この一節では、死後の世界が、希望をもって展望されている。「私たちは、時には意に反して向かって行くのだ、(…)或る幸福のほうへ」とみなされ、死が「暗い扉の向こうに広がる光り輝く広大な国」に擬せられているように、死後に待ちうけているのは、幸福であり、光あふれる世界だと信じられている。このように来世のことを希望をもって語らせるもの、それはまぎれもなく神への信頼感である。カトリック教会から離れていた、一九三七年の時点でも、恐怖ではなく信頼がグリーンの内心を支配していた。グリーン⁽³⁷⁾の宗教を特徴づけるこうした信頼感が、幼年時代、彼の母親によって与えられたものであることは、もはや繰り返すまでもない。

グリーン⁽³⁸⁾の母親の宗教教育を概観してきた。約言すれば、母親は幼いグリーンに、第一に、神の愛、神への愛を教え、第二に、聖書への愛を伝え、第三に、神を信頼することを悟らせた。母の教育によって、グリーン⁽³⁹⁾の宗教は形成され、彼の内心で信仰が培養された。この信仰はいつまでも保持されることになる。カトリック教会との関係をめぐって、揺れ動くことがあったとしても、グリーンは信仰を根本のところまで喪失したことはなかった。グリーンは一九五五年、「信じることなしに生きることは、私にはけつしてできることのように思われなかった」と総括し、一九三九年二月には、「私は無神論から守られた、四つ足で歩き、草を食べることから免れたのと同じように……神が存在しないかもしれないという考えは、今まで一度も私の心をかすめさえしなかった」と明言している。「開かれた千の道」では、過ぎ去った人生を点検しつつ、次のように反省している。

「のちに私はキリストから顔をそむけた。なぜならキリストは私のなかの肉体の飢えを満たすことを妨げたからだ。し

「私は、神がいかなる不幸からも自分を守ってくれていると、自分にとってはパシーでと同様、アルゴンヌにおいても危険は存在しないと、ほんとうに信じていた。おそらく思い上がりという言葉は強すぎるだろう。この信頼が私の宗教のすべてであり、私はそれを母に負っていた」(V、八九〇頁)。

従軍時代においても、グリーンが神への信頼感を保持していたこと、そしてこの信頼こそが母親から受けついだ宗教であったことが了解される。グリーンは同じ自伝のなかで、「私は天国に自分のための席がないなどと想像しさえもしなかった。私を苦しめていたのは、他人の救いだけだった」(V、八九八頁)と告白している。神への信頼は、当然、救いへの確信あるいは希望を生じさせる。この確信・希望もまた、全面的に失われることはないだろう。

グリーンは一九一六年のカトリシスムへの回心ののち、クレテ神父の導きで、修道士になる計画を立てる⁽³³⁾。だが一九一九年四月、この計画を放棄する。グリーンが修道院に入らず、俗世に残ることを知ったクレテ神父は、「彼は、私の救済に確信がもてないと、私に言って聞かせた」(V、一〇〇六頁)と『開かれた千の道』で回想されているように、グリーンは宗教的な救いを疑う考えを口にする。この言葉は、「石が深淵に落ちるように、私の心のうちに落ち」る(V、一〇〇六頁)。つまり神父の疑念はグリーンをしばし不安におのかせる。しかしグリーンは、「ボールのように、地に触れるとほとんどすぐさま、私は跳ね返った」(V、一〇〇六頁)と語っているごとく、ほどなく不安から立ち直る。ジャック・プチの言葉を借りれば、クレテ神父の返答は、「原初の信頼感をぐらつかせはしたが、深く傷つけることはなかったし、台なしにすることもなかった」⁽³⁴⁾のだ。救いへの希望は維持されていく。その証拠に、一九四九年、グリーンは、「私は地獄への恐れをいだかない。その恐れを得ようとしてさんざん苦勞したけれども、それをいただいたことは一度もない」⁽³⁵⁾と証言している。グリーンは地獄落ちを懸念しなかった。グリーンにおいては、神への畏怖よりも信頼のほうがまさっている。グリーンは一九三七年の『日記』に、こうしたためている。

「自己に打ち勝つかなる希望もばかげたように思われる、もっとも暗いときでさえ、とても遥かな高みには、永遠の

ようにグリーン生命を維持する書物だったのである。

『日記』の記述をとおして、聖書がグリーン(の人生)に決定的な影響をおよぼしていることが納得できる。このような聖書の存在を伝えたのは、グリーン之母であり、前述のように、母親が聖書の日々の朗読によって、幼児期から、グリーンの内心に聖書への愛をつちかつたのである。

母親の宗教教育にかんして、彼女が幼いグリーンに、神を信頼することを教えたという事実はきわめて重要だろう。『夜明け前の出発』において、次のような一節が見いだされる。

「あれは一九〇六年のことだったにちがいない。(…)今や少し英語が話せるようになっていた。そうしたある夜、私はベッドで泣きはじめた。母が、私の泣き声を客間で聞きつけて、急いでやってきた。「どうしたの?」私は立って、しゃくりあげながら、母の首に腕を巻きつけ、尋ねた。「ママ、はくは救われるの? (Am I saved?)」この瞬間を、時は私から奪い取ることはできないだろう。母は私をからだにぴったりと抱き締め、きつぱりとした声で言った。「ねえいいこと、おまえはイエス様が神様だと信じている。おまえには信仰がある。おまえは救われているのよ」。母はもつとやさしい口調で、「さあ、お休み」と付け加え、私にキスをした」(V、六六二―六六三頁)。

母親は、自分の魂の救いに不安をいだく息子ジュリアンにたいして、イエスが神であるという信仰をもっているがゆえに、「おまえは救われているのよ」(Tu es sauvé.)と明確に答えている。この《Tu es sauvé.》という言葉は、グリーンの中に深い影響をおよぼすことになる。グリーンは一九五二年の『日記』のなかで、「この言葉は、私の内部の、計り知れない奥底にまでおりていった³²」と認めている。グリーン之母は、《Tu es sauvé.》と断定することによって、彼の心に神への信頼感を植えた。この信頼は、彼の心から離れ去ることはなく、彼の宗教を特徴づけることになる。自伝第二卷「開かれた千の道」(一九六四)で、グリーンは、一九一七年、米軍の移動野戦病院付きの運転手として、アルゴンヌの前線におもむいていた頃を顧みながら、次のように書いている。

である宗教の世界に入ったことが言われていると思う。宗教は「世界」——この世と対立し、その真实性によって、この世が「一種、非現実の様相を帯びる」ほどまでに、グリーンを心をひきつけている。グリーンは聖書に立脚している。聖書は真実を語るがゆえに、彼の人生に影響を与えつづけることになる。

ここで、聖書がのちのグリーンにとって、いかなるものになったのかを少し見ておくことにしよう。グリーンは一九二六年四月十二日付の『日記』のなかで、「私が自分の真実を探し求めるのは、聖書においてであろう。私の人生がいかなるものになろうと、私の人生はこの書物の影響からけつして逃れることはないであろう」と述べて、聖書が自分の「真実」の探求のためであることを告白し、聖書が自分の人生の中で占めるであろう位置の大きさを指摘している。一九二六年といえ、グリーンは一九二九年の夏に、カトリック教会と絶縁し、ありとあらゆる宗教的実践を放棄するからである。教会から離れつつあった時期に、このような発言をしていることは注目すべきであろう。聖書はいついかなるときでも、グリーンが手もとから離さない本であり、絶えず読みつづけるべき書物であった。

また、グリーンは一九三七年、「聖書を開くたびに、私はそこに、自分の人生への、自分のさまざまな問題への、私のうちで精神的な弱さがとる特殊なたちへの、直接の暗示を見いだす。だからこそ私は、この本のなかに魔術的な書物を見いだめるのだ⁽³⁰⁾」と書いている。聖書はグリーンじしんのことを示唆しているがゆえに、彼にとって、人生を方向づけ、生き方を決定づける指針・指導書のごときものとしてある。さらに一九四一年、グリーンは、「聖書は、激しい不安のときに、私がつつぷりと飲む泉だったし、苦しみは遠去けられている、何だかわからぬ輝かしい彼方Vのことを夢想するために、そのへりに身を横たえる冷たい水だった」と述懐している。グリーンにとって、聖書は不安・苦しみを癒やし、「彼方」すなわち楽園を夢見させてくれるものでもある。聖書が「泉」、「水」という隠喩をともなっていることも看過することができない。人が水を飲むことなしに生きていけないように、グリーンは聖書を読まないでは生存できなかったであろう。聖書は水の

もそばに坐らせ、姉たちと同様、息子にも聖書を読み聞かせていた。グリーンはこの習慣を、「夜明け前の出発」のなかで追憶している。

「おそらく私は、神秘的な文句の静かな音となって頭の上を通りすぎていくあの声に耳を傾けていたのだろう。実際、ある日、私に衝撃を与えた啓示のようなものによって、若干の言葉の意味を把握していることに私は気づいたのだ。どんな言葉だったのだろうか？ もしそれがわかれば、今手探りで進んでいるこの薄暗がりの中が、たぶんもつとはつきりと見えることだろうに。しかしその瞬間、私の頭の中で何かが開かれたことはたしかである」（V、六六二頁）。

このように幼いグリーンは、聖書の言葉の意味を突然、理解することになり、聖書に親近感を覚え、教えを乞うていく。『日記』のなかで同じ思い出を問題にしつつ、グリーンは、「聖書にたいするこの大いなる愛情を、私はいつもいだいてきた。たぶん、毎日私たちに聖書を読んでくれていた母から受け継いだのであろう」と推察している。母親は聖書の日々の朗読によって、グリーンに聖書への愛を知らしめた。そして聖書は、グリーンにおいて、ほかの書物には見いだされない絶対的性格を獲得するに至る。自伝のなかで、グリーンは母が聖書のテキストをなんの説明もなく受け入れさせていたことを思い出しながら、こう記している。

「聖書は、あまり好奇心にかられて質問してはならない人格だった。他の本は本でしかないのに、聖書は一個の人格だった。聖書の中に見いだされるものは真実だった。なぜなら語っているのは神であるのだから。ほかの本にあるものは時として真実のこともあるが、別の仕方だった。一般的に言って、それは大して重要でなかった。徐々に私の心のなかに、現実の階梯と呼ぶようになるものが打ちたてられていった。宗教は真実だった。世界が一種、非現実の様相を帯びるほどに真実だった」（『夜明け前の出発』、V、七三〇頁）。

まず、聖書が質問を許さない「一個の人格」であったこと、そこで「語っているのは神である」ことが述べられている。聖書はグリーンにとって、他の本とは異なり、絶対的なものである。次に、真実を語る聖書をとおして、グリーンが、真実

感じて、グリーンが恐怖に襲われている事例を挙げながら、「おそらく大西洋を横断する血統であることが、これらの現象を少なくとも部分的に説明するだろう」⁽²⁴⁾と考察している。つまり幽霊や悪魔を感知するグリーンの資質を、彼のアメリカ人としての血筋によって理解しようとしている。グリーンはアメリカ国籍をもつ作家であったが、彼の血には、ウェールズ人、アイルランド人、スコットランド人、そしてイングランド人の血が四分の一ずつ流れているという。⁽²⁵⁾姉たちもまた幽霊の存在を感知していたという点を視野に入れると、目に見えないものを知覚するグリーンの資質は、彼のアングロ・サクソン系の血筋と結びつけて把握することができかもしれない。

五 母親の宗教教育

星空の観照が愛を啓示したがゆえに、宗教的な体験となったことは、はじめに論じたとおりである。星を眺めることによってグリーンの内心に芽生えた宗教は、敬虔なプロテスタントの信者であった母親⁽²⁶⁾の教育によって、はぐくまれていくことになる。母親はグリーンがやつと言葉を口にすることができるようになったとき、息子の前で英語で主の祈りをとえ、息子にそれを繰り返させている。『夜明け前の出発』のなかで、グリーンはこの場面を、「私は、自分に理解できないこれらの言葉を言いまちがえて台なしにしていた。けれどもこのつぶやきをとおして、母から私に、何かが伝わっていた。今日、私が信じるものの本質的部分は、そのとき、もつとも大いなる愛が語っていた薄暗がりの中で、私に与えられたのだ」(V、六五九頁)と追懐している。母親はグリーンに主の祈りをとえさせることによって、愛を教えた。愛とはもちろん、神の愛、神への愛である。母は、まずもって、神が人間を愛していること、それゆえに神を愛すべきことを子どもに自覚させたのである。

グリーンの母親は子どもたちの前で、聖書を朗読する習慣があった。その折、言葉の意味がはっきりとわからない息子を

はいやますばかりである。幽霊たちの気配が感じられるからだ。「私を取りまく闇は、静かにうごめくものでいっぱいだった」(V、七二三頁)とグリーンは振り返っている。この「静かにうごめくもの」が、幽霊たちを指し示すことは言を俟たない。このように、グリーンは幽霊、あるいは先に見たように、悪魔の存在を感知する子どもであった。目に見えないものを知覚するグリーンを先に指摘したが、目に見えないものの範囲は、グリーンにおいては、広がりをもっている。

もつとも、このような資質は、グリーン家族のなかで、彼ひとりだけのものではなかった。『夜明け前の出発』を読むと、姉たちもまた、幽霊の存在を感取していたことがわかる。一九〇四年から一〇年まで居住していたパシー通りのアパルトマンでは、長女エレオノールの部屋に、「時折、顔のない女が姿を現した」(V、六五三頁)し、その「顔のない女」は夜、「ベッドのすそに腰かけ」て、五女リュシーを「恐怖で身震い」させていた(V、六八〇頁)。この二人は、幽霊たちがドアのノブを回す物音に悩まされてもいた(V、六五四頁)。四女レッタは、一九一三年から移り住んだパリ郊外のル・ヴェジネの家で、母親が死ぬ四日前、「庭の背の高い柵」に「数人の男たちが黒い布を張りめぐらせている」ところを目撃している(V、七九三頁)。この「男たち」は三女アンヌには見えない。それゆえ、「男たち」はレッタの見た幻であり、葬儀を準備することによって母親の死を予告する亡霊であると解される。一九三三年十一月五日付の『日記』によれば、次女マリイもまた、パシー通りのアパルトマンに出没する幽霊たちに精通していた。⁽²²⁾ 自伝『青春』では、一九一六年に転居したコルタンベール通りのアパルトマンで、リュシーとアンヌが、長い廊下を行き来し、ドアに手をかける幽霊たちの物音を聞きわけたことが回想されている(V、一二七六頁)。

ところで、このようにグリーン家の人びとが幽霊もしくは悪魔といった存在を感じ取っていたという事実は、彼らがアン・グロ・サクソン系の血統であるということと無関係ではないように思われる。アントニオ・モールは、「グリーン一家は、典型的にイギリス人的な特質として、幽霊の存在を信じていた」⁽²³⁾と述べている。ユイターヴァールは、幽霊や悪魔の気配を

存在であるとするこの見方は、各個人が他の人びとと共有することができない自我を生きなければならぬという認識と対をなしている。「ほとんどけつして打ちたおすことができない柵」は、△交換不可能な自我▽という表現によって言いかえられるように思われる。△私▽が△私▽であることによつて、人間が孤独であるという考え方は、グリーンの間観の根本をなし、彼の小説はこの根本的な考え方にもとづいて作成されている。先に見た、最初の自我意識の体験は、星空の観照の体験と同様に、決定的・根源的なものであり、グリーンは孤独と愛を知ったがゆえに、この二つの体験によつて、人生の旅程の第一歩を踏み出したと判断できる。

四 悪魔・幽霊の感知

幼児期の星空の観照の体験を検討したとき、グリーンが目に見えないものを感知する素質にめぐまれた人間であると述べた。この素質は、グリーンが悪魔や幽霊の存在を感取しうる子どもであったという点からもたしかめられる。『夜明け前の出発』のなかで、グリーンは、一九〇七年頃の思い出として、母が家族の服をつめこんでいた衣裳戸棚の中に、悪魔の存在を嗅ぎわけた体験を披露している。すなわち、ある日のこと、その衣裳戸棚に悪魔が棲んでいると考え、戸棚の戸を開け、悪魔を呼び出そうとする。三たび呼んだとき、「衣服」が「動き」、「誰かを通すために、静かに分かれ」る（V、六五五頁）。こうして悪魔の気配を感じたジュリアンは逃げ出すのである。

またグリーンは、一九一〇年頃のこととして、幽霊の気配を察知した体験を記述している。グリーン一家はアンドレジイの別荘で夏休みを過ごしていたのであるが、夜の九時になると、ジュリアンは蠟燭の火だけを頼りに、部屋に上がっていかねばならなかった。だが暗闇の支配する部屋は「恐怖の場」（V、七二二頁）であるので、ジュリアンは階段のところできすくんでしまう。ラ・フォンテーヌの『寓話詩』をいきあたりばつたりに読んで、恐怖に打ち克とうとする。けれども恐怖

「(…) 五歳のころ、その意味は私の理解を越えるが、一種、破局のようなものが起こったはずだ。(…) 私は窓の前に腰かけていた。とそのとき、突然私は自分が存在していることを意識したのだ。

人間はみな、自分が自分じしんであり、私たちを取りまくものとはちがうという事実によって、世界のほかのものから急に切り離されるように感じる、あの独異な瞬間を経験するものだ。白状すれば、こうした事柄は私にはあまりはつきりとわからないので、その説明は専門家にまかせる。私が記憶しているのは、私にかんしてはその瞬間に樂園から出たということだけだ。そのひとときは、一人称単数が人間の生活の中に入り込んできて、最後の息をひきとるまで舞台の前面を嫉妬深く占めてしまうことになる憂鬱な瞬間であった。たしかに私はその後も幸せであった。しかし以前そうであったようにはなかった。△私▽という名の電撃的な天使によって、私たちが追い出されることになるエデンの園にいた時のようではなかった」(V、六五八頁)。

自己の存在を意識し、△私▽をはじめで自覚した体験が叙述されている。この体験は、「その瞬間に樂園から出た」とか、「△私▽という名の電撃的な天使によって、私たちが追い出されることになるエデンの園」とかいった言い方が示すように、失樂園の体験になぞらえられている。自我への意識とは、「一人称単数が人間の生活の中に入り込んできて、最後の息をひきとるまで舞台の前面を嫉妬深く占めてしまうことになる」と書かれているごとく、終生、個人が△私▽に支配され、△私▽を生きつづけなければならぬという事実の自覚である。また、自我を意識するとは、「自分が自分じしんであり、私たちを取りまくものとはちがうという事実によって、世界のほかのものから急に切り離されるように感じる」ことである。別の言葉でいえば、他のものとは異なる自己を意識するということであり、自らの孤立を自覚することでもある。要するに、自我意識とは、自己の根源的・絶対的孤独を認識することなのだ。

グリーンは一九四一年六月二十五日付『日記』のなかで、「人間は、他の人びとから、ほとんどけっして打ちたおすことができない柵によって切り離されている。これが私たち一人ひとりのドラマなのだ⁽²⁰⁾」との見解を表明している。人間が孤独

抵抗しがたい力によって、軽やかになったからだ全体がそっと持ち上げられ、虚空に浮かんでいるような印象をうけた」(Ⅶ、四四二頁)。

ここでは、「光り輝く点」すなわち星々を眺めることが、「地上」を離れて、「未知の世界」に上昇していくような感覚をもたらししている。この「未知の世界」とは、星空が啓示する彼方の世界であり、地上Ⅱこの世とは対立する世界であろう。またエリザベスは、「子どものときのように、彼女は、あらがいがたい愛がこの無数の光り輝く点のほうにそっと自分をひきつけているように思った」(Ⅶ、七一二頁)と語られているように、「愛」によって、星空Ⅱ彼方にいざなわれている。つまり星空の観照は、エリザベスにとって、「未知の世界」が開示されるとともに、「愛」が啓示され、もしくは、「愛」を感じる瞬間でもある。この「愛」はエリザベスの外にあるものなのか、それとも、内部に宿るものなのかは定かでない。しかしずれにせよ、星空の観照は、彼女においてもまた、神秘的・宗教的な体験と化している。

『レヴィアタン』『私があなたなら』『人みな夜にあつて』それに『遙かな国々』のなかの、星空の観照の場面を分析した。『日記』だけでなく、小説においても、星空の観照の瞬間は、神秘的・宗教的な体験のひとつとなっている。ここから、幼い頃に星を見て、誰かの、そして誰かへの愛を知った体験は、グリーン¹⁹の人生に甚大な影響をおよぼしたと論定できる。ジャック・プチによれば、グリーンは、はじめに引用した自伝の一節について、「人生全体にわたるすべてがそこでは言われている」と断言したという。幼児期のこの体験はグリーンにとって、根源的かつ決定的なものであったのである。

三 自我の意識

『夜明け前の出発』のなかでは、幼年時代のもっとも遠い思い出として、星空を見た体験とともに、次のような体験が報告されている。

星々がきらめいていることが想定される。ウィルフレッドはその晴天の夜空を見て、愛の衝動を不意に感じ、「自分の知らない誰か」にたいして、幾度となく「愛している！」(Je t'aime!)とつぶやき、精神的な重圧からの解放感を味わっている。この「誰か」とは人間なのか。神なのか。物語が始まったとき、ウィルフレッドは人びとから敬虔なカトリック信者だと認められている。だがその実、彼は肉体的な快楽を漁る欲望の人間である。したがって、ウィルフレッドの希求する愛は、人間への愛である。とはいえ、「愛している！」という言葉を繰り返すことによって彼が感じる「よろこび」は、「特別の」(singulière)とか、「まったく新しい」(toute nouvelle)とかいった形容詞によって修飾されているところから推しはかれるように、肉体的な枠内にとどまらずに、靈的な次元を獲得している。ここでの愛は、人間に向けられているが、神にも向かいうるものである。ウィルフレッドの内心の感情は、自伝『夜明け前の出発』の冒頭で語られているような、幼児期のグリーンが夜空の星を目の当たりにして覚えるあの「愛の衝動」と同質のものではないだろうか。ウィルフレッドの愛に応える者は誰もいない。一方的に愛するだけで、かの愛の存在は出現しない。しかし夜空を見て愛する思いに支配され、幸福にひたされるこの体験は、神秘的・宗教的なものと判定することができる。

グリーン晩年の三部作の第一巻『遙かな国々』(初版一九八七、改訂版一九九四)においては、女主人公エリザベスがいれば夜空の星を見あげて、感慨にふけっている。イギリスからアメリカ南部に渡ってきて、ウィリアム・ハーヴグロヴ、次いでチャーリー・ジョーンズの家を寄寓することになるエリザベスは、孤独な人生遍歴をつづける中で、星々を見つめて、あるときは、「幸福」(Ⅶ、三二五頁)を感じ、あるいは、「筆舌に尽くせないよろこび」(Ⅶ、四四二頁)に襲われ、あるときは、「かくも類い稀なよろこび」(Ⅶ、五五二頁)に身をゆだね、また別の瞬間には、「言いようのない恍惚」(Ⅶ、六〇一頁)を覚える。エリザベスは信仰をもたず、人間的な愛、地上的な幸福に、ためらうことなく身をまかせる女性である。けれども、彼女においても、星空の観照は、地上の世界とはちがった世界が開示される体験となる。

「この無数の光り輝く点を見つめすぎたために、彼女〔エリザベス〕は、頭の中で地上の消滅した未知の世界が旋回し、

この一節では、「その謎の不可解な意味は代る代る彼をなごませたり、不安にしたりするのだった」と描かれているように、星空の観照は、鎮静ないしやすらぎをもたらしているものの、はつきりとした幸福感をいだかせてはいない。けれどもファビアンは星々を見て、「ゆっくりとこの世の上の方に昇っていく」ような、あるいは「窓からそして家から遠去かつていく」ような感覚を味わっている。こうした上昇の感覚は、目に見えない、もう一つの世界の誘引への反応だと認定できる。ファビアンが不安におちいるのは、この世とは別の世界が啓示されたからにほかならない。「私があなたなら」は、転身(métamorphose)を主題とし、ファビアンが悪魔あるいは悪魔的人物から術を教わって、自分の肉体を離れて、他人の中に移り住んでいく物語である。ファビアンは悪魔の支配を受ける。だが作品の最初の部分には、主人公を神のほうに向かわせたかもしれないような、あるいは、向かわせうるような宗教的な体験が置かれているのである。

『人みな夜にあつて』のはじめのほうでも、主人公が夜空を眺める件りがある。臨終の床にある叔父ホレースを看取りにきているウィルフレッドは、叔父の家の庭の芝生の上に仰向けに横たわり、空を見あげるのだ。

「うなじの下で両手を組み合わせて、彼(ウィルフレッド)は木の葉の切れこみのあいだから見える空の深みに視線をさまよわせた。すると突然、自分が愛しているように思われた。誰を愛しているかは言えなかった。自分の心はあまりにも沢山の愛をため込んでいたので、一生分の愛がある、と彼は思った。だが彼は、自分の知らない誰かを力のかぎり愛していた。目を閉じ、異常なまでの熱意をこめて、「愛している!」とつぶやいた。この言葉は不可解な重みから彼を解放してくれた。十回以上も、この短い文句が彼の唇のうえをさまよった。今まで誰にもそんなふうにはなかったし、言うべき相手もいなかった。しかし彼は特別のよろこび、まったく新しいよろこびをいだいて、繰り返し繰り返しその文句を口にした。知らないうちに、彼は眠りこんだ」(Ⅲ、四七〇—四七二頁)。

この件りでは、星の描写はなされていない。しかし、ウィルフレッドが芝生に寝そべっているという事実から、空は晴れ、

る。今度は小説のなかのこの場面を瞥見しておこう。まず『レヴィアタン』（一九二九）で、家庭教師の仕事を終えて帰宅した主人公のゲレが、自室の、妻が開けた窓から星空を見ている。

「夜空が突然現れた。あたかも空が部屋の中に入り込み、その星と闇とで一杯にするかのようであった。（…）不意に何か彼の心臓を高鳴らせた。それは、彼を呼びよせているように見える、この静謐な広大無辺の空に向かう漠とした飛翔感だった。騒々しい人間の言葉を耳にしたあと、この暗い空の深みにはなんとという静けさがあることだろう。

「ああ、幸せだ！」と彼は思った。まるでこの言葉の力をこれまで一度も感得したことがなかったかのよう」（I、六一〇頁）。

ゲレが「ああ、幸せだ！」（*Oh! être heureux!*）と思っているように、星空の観照はここでも幸福感をもたらしている。ゲレは、「彼を呼びよせているように見える」夜空に向かつての「漠とした飛翔感」を覚えている。この「飛翔感」は地上の世界のほかに別の世界が存在することを嗅ぎつけた結果、生じたものであり、つまるところ、目に見えない世界の誘引にたいする反応であると解することができる。したがって、ゲレの幸福感は、目に見えない世界を発見したことでのよろこびを意味し、本人が自覚していないとはいえ、宗教的な感情であるとみなしうる。

「私があなたなら」（一九四七、新版一九七〇）の冒頭のところで、夜、自室にもどった主人公ファビアンが窓を開け、手摺に肘をつき、屋根の彼方の「黒い広大な空が、星々のまたたく深淵をひろげてい」るのを凝視する場面を見いだすことができる。

「こんなふうに夜空の大通りを眺めるたびに、彼は自分がゆつくりとこの世の上の方に昇っていくような気がした。秘密の秩序で並ぶ、これらの光り輝く点の群れは、謎のように彼の精神を魅惑するのだった。そしてその謎の不可解な意味は代る代る彼をなごませたり、不安にしたりするのだった。数分が過ぎた。見つめれば見つめるほど、肘にあたる手摺の感触が消え去るわけでもないのに、自分が窓からそして家から遠去かっていくように感じられるのだった」（II、八四四

グリーンは星空の観照にふれて、「私は夜空を熟視することに自分を失う、他の人なら、おさらばするために橋から身を投げるように。だが私の場合は、子ども時代から探し求めているものを見いだすためののだ」と打ち明けている。幼児期に星空を見て愛を感じた体験が、こころに深い痕跡をとどめていることが、この文面から読みとれる。グリーンは、一九四〇年八月、ロックウエル・ケントという画家のデッサン——手に持った鏡に、夜の空の或る星座が映つているところを描いたデッサン——を見たときの印象を、こう書きとめている。

「そこには、世界の悲しさを想起させるものがあるように私には思われた。その悲しさは、自分が存在するということからくるもので、私が子どもの頃、窓ガラスのむこうに星々が上がっているのを眺めていたときに、私の心を非常に深く揺り動かした悲しさだった。星のきらめきは私を表現しようのないメランコリーの中に投げ入れた。そこから、のちに宗教的感情が生じた。(…)あるいは、あの言いようのない悲しさの感情は、すでにして、宗教的感情であつたのかもしれない」。

この文章においても、子ども時代の星空の観照の体験のことが言及されている。しかしながら、はじめに引用した、自伝のなかの記述とはちがって、その観照は「愛の衝動」ではなく、生きることの「悲しさ」および「メランコリー」を覚えさせている。グリーンはこうした思いを「宗教的感情」と判じている。それはなぜか。「悲しさの感情」がこの世の空しさの自覚に由来するとともに、あの世へのあこがれを生成するからであろう。目に見えるものの背後に隠れた、目に見えないもの、換言すれば、神の国への憧憬をつのらせるからだと思われる。後年、グリーンが星空を見ることで味わうことになる幸福の感情も、この世で生きることの空しさ、悲しさと表裏をなすのかもしれない。星空の観照が死への誘惑をとまなうのは、このためであろう。それゆえ、この幸福感もまた、目に見えない世界を感知したことの反応としてあり、宗教的な感情だと受けとれる。

このように星空の観照は『日記』においてしばしば問題になっているが、小説のなかでも往々にして目にすることができ

のような愛の宗教には、星空を眺めることによって、大いなる愛を知覚した原初の思い出が深く関与していると思われる。また、この思い出から、グリーンが目に見えないものを感知する素質にめぐまれた人間であることが看取される。幼いジュリアンが見たという「あの人」「誰か」は、もともと不可視の存在であるのだから。この神秘の出会いには恩寵によるものであるのかもしれないが、ともかく visionnaire 的な彼の資質を認知しておくべきである。

星空の観照は、幼い頃のグリーンにかの愛の存在を啓示しただけに、後年、幸福感をもたらす特権的瞬間となる。『日記』を参照しつつ、このことを概観しておこう。¹³たとえば、一九三三年四月、チュニジアの国の、地中海に面したハンマーメトという町に旅行中、グリーンは、青から黒色に変わった空に輝く星々をオペラグラスで見た体験を語っている。

「空を見れば見るほど、私には、地上での私たちの生活が重要性をもたないように思われた。しかし私は幸福だった。できることなら、人が海に身を投げるように、空の中に落ちたかった¹⁴」。

星空の眺望は、ここでは、「できることなら、(…)空の中に落ちたかった」と披瀝されているように、天国に行きたいという気持ち呼びさまし、この世で生きることをどうでもよいと思わせるほど、同じことであるが、死への誘惑に駆りたてるほどに強烈な幸福感をいだかせている。

グリーンは一九三八年八月にも、夜の散歩の途中、「星々をちりばめた空」を見ながら、「自分の用いうるいかなる言葉もうまく言いあらわしえないほどの深いよろこび」を感じ、「何も説明できない神秘的な幸福感」に襲われている。¹⁵一九四一年二月には、滞在先のアメリカで、「ボルチモアからノーフォークに向かう船の上で、船室の窓から、満月の光線を浴びた乳白色の海水のひろがり眺め」て、「元氣」を取りもどすとともに、「この世のものとは思われない平和」(paix surnaturelle)を味わっている。¹⁶グリーンはこの夜のことを振り返りながら、「多くの悲しみが私たちに投げ放たれるが、星々に目を向けることによって、その悲しみがいくらか和らげられることがありうるのだ¹⁶」と解説している。ここでも星の光は月の光とともに、「悲しみ」を癒やし、「元氣」を与えているがゆえに、幸福感を生じさせていると考えられる。

「私は明かりのないその部屋でひとりきりだった。そして空を見上げて、愛の衝動としか呼びぶよのないものを感じた。私はこの世で愛しはした。しかしこの短い瞬間におけるように愛したことは一度もない。それでいて誰を愛しているのかはわからなかった。けれども私には、あの人⁽⁷⁾がいて、私を見ながら、あの人⁽⁷⁾もまた私を愛してくれていることがわかっていた。(…)誰か⁽⁸⁾がいて、言葉なき会話を私にしてくれていることを私は確信していた」(V、六五四頁⁽⁸⁾)。

星空の観照が「愛の衝動」を感じさせ、何者かとの出会いをひき起こしたことが語られている。ここでの「あの人」(III)、「誰か」(quelqu'un)は具体的に名指されていないけれども、かの愛の存在であると推定される。したがって、このひとときは宗教的な体験の瞬間である。ジャック・プチはこの一節を踏まえて、グリーン⁽⁹⁾の信仰を、「まずもって或る現存の感情」だと規定している。信仰はグリーン⁽⁹⁾において、かの存在との直接的な出会い、その現存の自覚によって芽生え、はぐくまれていくのである。

グリーンの宗教が愛の宗教であることも、この引用文からたしかめられる。なぜなら彼の宗教は、この上もなく愛したことから始まり、「あの人」もまた自分を愛してくれているのだという確信から生じているのだから。一九二四年、衰えつつある信仰をひきとめるために作成した⁽¹⁰⁾「フランスのカトリック信者に対するパンフレット」のなかで、グリーンは、「愛の訪れを受けると、それ「私たちの魂」は、死の日まで付きまとい、愛の残酷な思い出を保ちつづけるだろう」(I、八八五頁)と書いている。この記述には、夜空の星々を見て、かの存在の愛を実感した幼児期の体験が刻印されているだろう。そして「愛の訪れを受けると」という言い方が示すように、神は愛じたいであり、その愛に愛で応えることがグリーンの宗教を構成する。「かつて一度も顔を見たことがなく、声も聞いたことがない誰かを死ぬほどまでに愛すること、これがキリスト教のすべてなのだ⁽¹¹⁾」とグリーンは主張し、さらに一九七一年の「日記」では、「宗教の最後の言葉、まったき最後の言葉は愛である。そのほかの言葉は存在しない。愛は信仰や希望を包含してしまう。愛は不信仰の世紀にたいしてなしうる唯一の回答なのだ⁽¹²⁾」と結論づけている。グリーンは「信仰」や「希望」よりも「愛」を優先させ、重要視する。こ

出会いと彼への不可能な愛、マークと別れてからの、パリでの苦渋にみちた肉体生活が端的に示すように、自伝の後半の、『遙かな土地』（一九六六）『青春』（一九七四）の二巻は、同性愛を最大の主題にした書物である。しかし自らの人生のもっとも遠い記憶にまで遡って書きはじめられた、グリーン⁶の自伝は、ただ単に性愛の秘密を読者につまびらかにすることのみを目的としているのだろうか。それに読者とは誰なのか。神あるいは孤独な他者だけではなく、同時に自分じしんをも含むのではないのか。グリーンは、自伝第一巻『夜明け前の出発』（一九六三）のなかで、「できれば私は、誕生から死まで、私の一生をつらぬき、導き、つなぎ、そして説明してくれるような、髪の毛よりも細かい糸を見つけないと思う」（V、七〇九頁）⁶との意向を示している。自伝執筆、告白とは、己れの過去を再構成することによって、自己理解に、「私じしん、この見知らぬ人」の謎を解明することに、狙いを定めた営みでもあるのではないだろうか。

グリーンは『夜明け前の出発』のエピグラフとして、「子どもは大人の父親である」というワーズワースの詩句をかかげている。ここから察知できるように、一九一四年十二月の母の死までの、グリーンの子どもの時代は、彼の人間性・人格を形成した重大な時期である。本稿では、この時期を扱った『夜明け前の出発』を主な検討対象としつつ、グリーンが理解しようとした自分の子ども時代が、言いかえれば、彼の人生の出発が、いかなるものであったのか、彼のその後の人生と作品とかがわり合わせながら、素描したいと思う。そうすることによって、グリーンの評伝のこころみへの、ささやかな第一歩としたい。

二 星空の観照

グリーンは『夜明け前の出発』のなかで、幼年時代のもっとも早い思い出として、両親の部屋の窓から、夜空に「いくつかの星が輝いている」のを目撃したひとときの体験を伝えている。

一 はじめに

ジュリアン・グリーン（一九〇〇—一九九八）は一九四二年七月十九日付の『日記』のなかで、「私は自分じしんについての真実を語ることができればと願う。（…）できることなら私はいつか、一時間、さもなければ数分だけでもよいから、私の真実を言いたいのだ⁽¹⁾」と書き、一九四八年十月二十四日には、「私はいかなる代価を払ってでも真実を語りたかった⁽²⁾」と言っている。自己の真実を語ることの衝動、自己表白への欲求——これがグリーン⁽³⁾の作家活動をささえたエネルギーであることはことわるまでもない。一九三八年からの『日記』の刊行はそれを示唆する。けれども「私のほんとうの日記は私の小説のなかにある⁽³⁾」という証言から明らかのように、グリーンにとっては、創作の営みこそが、とりもなおさず告白の願いをみたすべき行為であった。

グリーンは告白的資質を有する作家である。「人みな夜にあつて」（一九六〇）に至るまでの創作作品群は告白＝自伝への傾斜をはらみながら変遷してきた。この事実の大きな要因として、グリーンが同性愛の性向の秘密をかかえた人であったことが挙げられる。私は以前、自伝小説（roman personnel）と規定しうるグリーン⁽⁴⁾の小説のなかでも、もっとも自伝的な作品の一つとみなしうる『悪人』（一九五五、完全版一九七三）を取りあげ、この作品の読解および執筆、出版過程の検討をつうじて、彼における告白の問題を考察したことがあった⁽⁴⁾。そして△告白▽とは同性愛の性向にからまる秘密の開示であり、この開示をとおして、神および孤独な他者のもとへの到達を目指す営為であると指摘したことがあった。

だが、自己の真実を語ることへの希求とは、同性愛者としての自己の秘密を公けにすることだけを意味するのだろうか。たしかに、一九六〇年代に入ってから、グリーンが執筆・公表することになる自伝⁽⁵⁾を一読すると、同性愛にかかわる若き日の体験が彼の人生において決定的に重要な位置を占めることが理解できる。ヴァージニア大学留学時代の、あのマークとの

ジュリアン・グリーンの出発（一）

井上三朗

目次

- 一 はじめに
- 二 星空の観照
- 三 自我の意識
- 四 悪魔・幽霊の感知
- 五 母親の宗教教育
- 六 母親の性教育と純粹志向
- 七 目に見えるものの誘惑
- 八 孤独意識
- 九 二元論的世界観の形成と突然の幸福
- 十 母の死
- 十一 おわりに

（太字は今回掲載分）